

受験の価値観で生きて

【あらまし】

優秀な姉がいる。その姉に追いつこうと思っても、追いつけない自分。高校受験に合格するまでの「演じる自分」を止め、自分らしく生き始めた。家族の期待に応えるために生きることは、時には苦しい日々になる。

●小見出し

寂しさをこらえ続けた日々

人よりできることを目指した時

演じることを覚えた時期

部活動一筋だった高校時代

楽しい大学生活

寂しさを「らえ続けた日々

私の家庭は、両親が共働きであった。父親は会社員、母親は小学校教諭、姉は羨ましくも、なんでもできる優秀な姉であった。忙しい両親のもとで育ったので、保育園の送迎も祖父がしてくれていた。誰もいない寂しい家へ一番に帰る「鍵っ子」だった。周りにはみんな母親が迎えに来て、手をつないで帰って行くのだが、私だけが祖父の迎えだったことに、当時はものすごく苦しい感情を抱いていて、何も悪くない祖父に対して憎い感情を抱いたことさえあった。

ある時一度だけ母親が迎えに来たことがあり、嬉しくてたまらなかったのを今でも鮮明に覚えているが、自宅への道とは違う交差点を曲がり、着いたところは祖父の家だった。そしてその日に祖父が他界したことを知ると、憎い感情を少しでも抱いた自分に嫌気がさした。

人よりできる「こと」を目指した時

小学生の頃の私を振り返ると、「人よりできること」が全てであり、それがイコール「幸せなこと」であるという価値観が強かった。優秀な姉の影響もあってか、常に周りよりも先を行き、普通よりも上でないと満足できなかった自分がいた気がする。国語の授業、算数の授業、運動会のかげっこや通知表の成績。完璧なことが全てであり、失敗は避けるべきものであると考えていた。だからこそ学校とは別に、ピアノ、習字、スイミング、そろばん、

バレーボールの練習に学習塾、できることを極めるために、時には一日に三つの習い事をこなす日もあった。

幼いながらも忙しい毎日だったので、もちろん大変だった記憶も残ってはいるのだが、当時は一つ一つをこなすのに精一杯であるのと同時に、何よりも完璧に近づぐために必死だった。できることが増えれば増えるほど、また、褒められると嬉しく、自分の大きな自信になった。それとは逆に、できないことが見つかる、悔しくてしょうがなくて、できるようにと努力した。そしていつの間にか「負けず嫌い」な自分が作られていった。ただ、そんな自分も嫌いじゃなかったし、毎日の生活に充実感があつたことは確かだった。

演じることを覚えた時期

近くの小学校2校の生徒が集まる中学校へ入学した私だったが、今振り返ると、この時期が一番辛く苦しかった気がする。その一番の原因が、私の母の教え子たちと生活をともにすることだった。私の母は一方の小学校の六年生を担任していたので、その後卒業した生徒がクラスの半分を占めた教室で、中学時代を過ごした。私の中学校生活は、「〇〇先生の娘」と、私の姉の存在を知る先生たちからの、「〇〇さんの妹」という見られ方の中での日々だった。

周りには私自身が思っているほど、そのような視線で私のことを見ていなかったのかもしれないが、当時の私はそのような視点か

ら逃れることができず、自分で自分の首を締めながら「いい子」を作り上げてきた。小学校までも優秀な姉が歩んできた道を同じように進むことは、あながち間違っていることではないと思ってきたし、自分から切り開くことをする経験がない私には、当然楽な面も多かった。しかし時が経つにつれて、その道から外れてはならない怖さも実感していった。

それをひしひしと感じたのが、高校受験。私の暮らす地域の有名な進学校に、父親も母親も姉も、家族全員が進学していた。だからといって、私も絶対に進学しなければならないというわけではなかったし、私には自分の進みたい道に進む、さまざまな選択肢があった。

しかしその時は、家族全員が進んできた道に同じように進むべきであるという「義務感」のようなものが付いて、離れなかった。当時通っていた学習塾の先生からも、「〇〇と直子はこれから塾に缶詰めな」と言われ、学校から家に帰ったらすぐに学習塾へ向かい、コンビ二のお弁当を食べて、日付が変わる頃まで机に向かった。

そして合格発表当日。私は姉と一緒に結果を見に行ったのだが、自分の受験番号が掲示板にあるのを確認すると、涙があふれて止まらなかった。姉には不合格だったので泣いているのだと最初思われたみたいだが、あの時の達成感は初めて味わうものだった。そしてこの時から、私の「演じる自分」という皮が、少しずつ剥がれていったような気がする。

部活動一筋だった高校時代

高校生活のスタートが、私にとってはゴールだった。高校生活もこれからであるという周りとは対照に、「〇〇高校生」になったことが、私に大きな達成感と充実感を与えた。だから、中学まであれだけ一生懸命取り組んでいた学習にも、飽き飽きしていた自分がいた。何より、ゴールテープを切った後の、次の目標が何も見えてこなかった。

やはり、目標がないと努力できない私は、その後学校内の平均と比べると、全くと言っていいほど勉強をしなかったし、練習の厳しいバレーボール部に入部したこともあって、部活動にひたすら力を注いだ。部活動では怪我の連続で、まともに練習した期間や試合に出た記憶が少ない。みんなと同じように練習を行いたいのには、自分の思うように動かない足や腰や手頸。どんどん上達していく周りを見ると、もどかしい気持ちでいっぱいだった。

その中でも大きな怪我をした時には、「もう辞めたい」と何度も思った。その時はもう、体も心もボロボロだった。しかし、たくさんさんの人の温かい励ましが、何よりもの救いであり、私を継続の道へと導いてくれた。

「バレーを始めたのが一番遅かったけど、一番上達したのはお前だ」と話してくれた小学校のクラブチームの監督や、「どっちの道をとっても後悔の念が残るのならば、後悔の少ない

と思う道に進みなさい」と声をかけてくれた中学校の顧問の先生。「バレーを辞めることで、人とのつながりも薄れていってしまう。もう少し頑張ってみないか？」と伝えてくれた高校の顧問の先生、「立花さんが諦めないならば、私たちも諦めません」とメダルをくれたリハビリの先生。そして何よりも、家族からのいろいろな励ましがあつてこそ高校三年間バレーボールを続けることができ、今もなお、バレーを辞めたくなく、辞められずにいる自分がいる気がする。

バレーボールを通してたくさんの人と出会い、さまざまな経験することができた。今ではそれが、自分の大きな財産となつていると思う。

そして高校三年の夏に部活動を引退したあと、大学受験に向けて自分なりに勉強をした。毎朝生物室で友人と学習に励み、授業後も下校時刻までクラスの仲間と一緒に頑張った。部活一筋に過ごした高校生活だったので、やはり学習のほうは思うように結果がついてこないことも多かったが、最終的に春にはA大学への入学が決まった。

楽しい大学生生活

大学生生活の始まりと同時に、実家を離れ一人暮らしも始めた。それまでは家で両親に頼りっきりの生活をしてきたので、最初のご飯の炊き方、料理の仕方、洗濯機の回し方、何もかも分からなくて、本当にやっていけるのか不安だったし、慣れないことばか

りの大変な生活だった。一人暮らしの生活にも少しずつ慣れてくると、親のありがたみが身にしみて理解でき、感謝の気持ちでいっぱいになった。

大学自体は自分の学びたい内容を学習することができるという面で、すごく自由の幅が広がった気がした。ただ選択肢も増えて自由が多くなるということは、自ら動き、自分で自分のやる気を引き出さないといけないので、与えられたものをこなすことに慣れ親しんできた私は、今もなお大学生の自由な生活には戸惑う部分もある。そして残り半分の大学生活も、自分自身に納得のいく、充実したものにしたいと思つている。

いま、自分の人生を書くことで見つめ直し、自分の中でいろいろな整理がついた。たくさん喜びや悲しみ、後悔もあれば、感謝の気持ちもあり、それを再確認できたと思う。今までの人生を糧にして、これからの人生をうるおいあるものにしていきたいいなと感じている。